

2. サマー・ワーク・キャンプ 2015 開催報告

<1日目：9月12日（土）>

朝方，地震によるダイヤの乱れあり，開始時間は予定より5分遅れ。
いらした方には壁面の高井さんへの質問コーナーへの記入をお願いしました。

講演「学校図書館と公共図書館がつながるために」

～図書館司書となるまでのお話～

高井 陽氏（大田区立大森南図書館 司書）

「自分の半分はメロンパンでできている」と、導入から和んだ雰囲気が始まった講演でした。もちろん，傍らには知る人ぞ知る，トレードマークのパペット（本日はねずみくん）も控えています。

高井さんが図書館司書になるまで，また現在考えていらっしゃるということについて伺いました。



学校図書館との出会い 学生時代

学校図書館の最初の記憶は，代本板を使って「シートン動物記」を借りたことです。小学校3年生の時に新設校に転校しまして，ここには毎日図書館を開けてくれる先生がいました。5～6年生が小学生時代の図書館活用のピークかな，友だちが「ルパン」を紹介してくれて，このシリーズに熱中しました。

中学校の図書館は，管理する人がいない，あまり開かない，ただの本置き場という場所でした。しかも公共図書館は学区外で遠いのでほぼ使わず。この頃，古本屋というもの存在を知りました！

登校5分の高校時代にして初めて，衝撃の図書館体験（常に人がいる！）をしました。そして，当時20代だったと思われる師匠（学校司書）と出会いました！高校の学校図書館では，マンガも含めて幅広い本と出会い，リクエストをすると買って貰える（！）

のも驚きでした。

準備室で漫画を読むために、図書館の仕事を手伝っていたら、師匠から「図書委員になりました」とメモが届きました。それ以来、図書委員の活動に没頭しましたが、読書量は減ってしまいました。しかし、他校の図書館を公認欠席扱いで見学に行ったり、「図書委員ってこんな活動ができるんだ！」という様々な体験はとても大きかったです。

“家でも学校でもないサードプレイス”としての場所でもありました。

司書への道

大学時代、「司書になりたい」という希望を抱いたのですが、師匠には反対されました。それでも司書になりたかったのでその道を進むことにしました。

高校図書館時代(半年間)

学生だった頃の受ける側から提供する側へ。図書委員と交流することを大切にしていました。

市立図書館時代(5年間)

アルバイトからの昇格で嘱託になりました。実践で公共図書館の基礎を学びました。学校図書館、公共図書館も根幹は一緒だと考えるようになり、人との出会いにもとても恵まれました。

暗黒時代(1年間)

会社に入り業務委託で図書館に行き、仕事に対する悩み・葛藤を経験した後、1年で退社しました。師匠達からも怒られました。そこから再度就活をして現在の図書館へ着任しました。師匠と「3年間はガマン！」と約束しました。

公立図書館時代(現在)

意識的に外に出てつながりを持つようにして、更にいろんな人と出会いました。アイデアを蓄積することも大切です。朝ドラ関連で地域の活性化を！という仕事が発生し、張り切って企画を考えて実行しました。

他県との交流企画が成功し、次も企画をする事になったり、再度朝ドラとの関連企画もすることになりました。また、スポーツクラブなどと異業種連携を地域情報も含めて行っています。応援の常設展示なども行っています。

このような成功体験から仕事に自信が持てるようになり、現在のいろいろな好循環に繋がっています。

「生涯学習」は潜在的なものだと思います。

自分にとっての学校図書館は、1. 居場所、2. 仲間、3. 経験・体験（外での体験）、4. 目標（将来司書になりたい）を獲得した場所でした。読書体験の話がこれまで出なかったのは、図書館を授業や勉強で利用した記憶がほとんどないからです。学校図書館で学んだことは「人生」です。今の仕事や生涯学習という枠組みを学んできました。

学校図書館と公共図書館は人の人生を軸にしてつながっているのではないのでしょうか。学校図書館は社会の入り口・接点であり、司書はその水先案内人(実践者)です。

今の目標は、大人になっても「図書館って使える！」と感じてもらうことです。

1人職場である学校司書の課題とは何なのでしょう。

相談相手も必要でしょう。司書だって学びが必要ですが、今や学ぶ機会は「研修・学習会・講演会・飲み会・SNS」など、どこにでもあります。

つながりはどこにでもあるので「いっちょかみ」でとにかく関わるのが大事です。他業種や他館種でも学ぶことはあります。専門図書館にも注目しています。できる時にできる事をできる範囲でいいんです！

出会いの場を広げていく時には、学校司書も名刺があると便利なので、必ず持ちましょう。そして名刺には自分なりのキャッチコピーを入れてアピールしましょう。とにかくたくさん「点」を打ち続けること、それはいつか「面」になります。自分も一生学習を続けます。

高井さん講演 質疑応答

Q: 高井さんはパペマペの中の人ですか？

A: 公式には、違います。

Q: マペットはいくつぐらいお持ちですか？

A: あちこち行くたびに買うようになり、現在では15体ほど。

Q: 名刺について

A: ひらめきを現す「！」とインフォメーションを現す「i」の形が似ているのを利用したキャッチコピーを入れています。

Q: 図書館に来ない子どもにどう対していますか。

A: こちらから出ていく。サッカースタジアムでも図書館ブースで出張。オフサイドのルールがよく分からない、という方に本を紹介した。たとえば、公共図書館ではサッカーの試合がある日にスタジアムで出張図書館をした例がある。図書館を認知してもらう活動。

Q: 高井さんは師匠と仲が良いようですが、児童生徒との適切な距離って？

A: 年代によって、多少感じ方は違うと思いますが、小学生とは距離が近く感じる。またこちらから導く時もある。「この人は味方だ」という感覚も大切では。先生と司書は違う。「本、借りてね」とは言いたくない。「ここに本があるよ」という場面を作って、自発的に読みたくなる環境を作る。

Q: 大学の時に、大学図書館とはどのようにかかわったのですか？

A: 大学図書館が改装中でほぼ使っていない。なので、今日の話では大学時代の話が出て来なかった。どうやって卒論を仕上げたのか自分でもよく分からない。

Q: 学校図書館に対する支援、団体貸出で大量に借りることなど、どう考えるか

A: まだまだ双方に問題あり。物流システムが無い、学校側に人がいない、図書館側のレベルも問題。

(記・平松奈緒子)

SWC2015 を終えて・・・高井陽さんメッセージ

SWC 2015 で登壇させていただきまして、ありがとうございます。最初にお話をいただいた時はどんなことをお話すればよいのか不安だったのですが、何とかやり遂げることができました。いかがでしたでしょうか。おかげさまで、改めて自分がここまで図書館とどう関わってきたのかということ振り返る機会にもなりました。個人的内容を多分に含むたない話でしたが、皆さまに何かを感じ取っていただけたとしたら幸いです。現在、私は公共図書館で仕事をしているわけですが、ほとんど学校図書館での取り組みに接する機会がないことが気になっています。学校図書館の現場は、外からはなかなか見えにくいのが現状です。せつかくのすばらしい努力と実践があるのに、もったいない。もっともっとアピールするべきではないでしょうか。それは、学校の中に図書館があって、そこに人がいることの重要性をもっと多くの人に理解してもらうため

にも、必要なことだと思います。人生の中に図書館があり続けるためには、すてきな学校図書館の経験は欠かせませんよ。少なくとも私の経験ではそうでした。そこをお伝えしたかったのです。そして、図書館は縦軸にも横軸にもつながっています。まずはほんの一步だけ、思い切って図書館の外に出てみてください。きっと誰かが、抱えている悩みを解決するヒントを教えてくれるはずです。さあ、これから“点”を“面”にしていきましょう！

